2020（令和 2）年 1 月 15 日
「ロシア語における数詞句とその格表示について」
発表者：後藤雄介（東京外国語大学大学院博士後期課程）

ロシア語において、数詞+NP からなる数詞句(NumP)は、その非常に複雑な形態統語的特徴をめぐり多くの研究が存在する。その中で、本発表では NumP(および内部の NP)への格付与と格表示について考察した。従来の研究では、NumP が構造格環境にある場合、数詞と NP の格は異なり(heterogeneous なパターン)、NP は数詞から数量属格が付与されるが、語彙格環境にある場合は数詞と NP の格が同じになる(homogeneous なパターン)。統率・束縛理論の枠組みでは、どちらのパターンでも NumP 内の NP への格付与は“1 度のみ”起こる。一方で、現行の極小主義プログラムの枠組みにおいては、語彙格環境の NumP では NP の格素性の値の“上書き”が生じてしまう。そこで、本発表では、格素性の値の上書きを排除した分析を提示し、構造格環境と語彙格環境のいずれにおいても、数詞と NP の格は同じになることを提案した。具体的には、数詞は NP へ格付与せず、NumP へ格が付与された段階で書き換え規則: Str. Case⇒genq/__+[範疇素性 *num*]を設定した。この提案では、heterogeneous なパターンと homogeneous なパターンの対立は消失することになる。また、数詞に先行する数量属格の形容詞への格付与が、従来想定されてきたような移動や三肢枝分かれの構造を採用せずとも、自然に導くことが可能である。さらに、適切な格表示のパターンを導くためには、顕在的な冠詞を持たないロシア語においても DP の投射が必要であることを論じた。最後に、1,000 や 1 万の場合の格表示についても検討し、この 2 つについては、名詞の場合と数詞の場合の 2 つを想定すべきであることも論じた。